

## 移民の歌 佐佐木頼綱

・胸に手を置き星条旗仰ぐとき移民にも市民にもなれず漂う

西岡 徳江

十二月八日、クリシュナ智子氏から連絡があり、病氣療養中だった西岡徳江氏が亡くなられた事を知った。享年六十七歳。ご冥福を祈りつつ私の知る範囲で彼女の歌と歌業を記したい。

西岡はオハイオ州の小児科医院にナースとして勤務し、渡辺幸一氏が主催する「世界樹」に歌を寄せていた。掲載されていた仕事録、社会録に惹かれ「短歌往来」のリレー連載「海外通信」の原稿依頼を送ったのが私と西岡との最初のやり取りであった。

・新生児の頭髮の豊かさ黒さをも誉められておりアジアの子ゆえ  
 ・熱の子も忍者に仮装し母とくるハロウィン間近の小児外来  
 ・老患者のわがまま全て受け入れて受け入れられぬ差別語残る  
 病院での歌。三首目は「AP」と呼ばれた際の歌である。有色人種が過半数となった米国だが白人優位の感覚は根強い。太平洋戦争を経験した世代には一生変わらぬ認識であろう。  
 ・投票日までを二人で歩きたりインディアン・サマーの陽のふる道を

マイノリティーである西岡にオバマ支持である事を伝えてきてくれた白人同僚との一場面。このオバマ大統領再選挙では白人の六割が共和党ロムニーに投票した。

・毒ガスが出るとシャワーを忌み嫌うローズは今もゲッターに生

く

・認知症の喜美子とわれのふるさとを重ねて歌う「ふるさと」遠いボランティアの一人として活動していたアルツハイマー専門施設での歌。異国で人生を終える難しさを感じていたのだろう。「貴美子」は林貴美子という人物で学生時代には早稲田の雄弁会に所属し、日経婦人協会長や日本語学校校長を務めた。

移民であったことを大きな歌柄としつつ、西岡はテロや銃規制など米国社会の出来事を多く歌に残している。

また移民として、マイノリティーとして働く人々に敬意を払い、作品を残す作業にも尽力した。米国最大の日系新聞「羅府新報」には伊勢正直、山口千代両氏が主宰する「移植林」という短歌欄があり、西岡も当初は投稿者の一人であったが、伊勢、山口氏の引退に伴い二〇〇〇年より「新移植林」を主宰し跡を引き継いでいる。「移植林」「新移植林」の投稿者にはカリフォルニア州ソルダッド州立刑務所で暮らす郷隼人もいた。郷は一九八五年に収監され、一九八八年より「移植林」へ投稿を開始。その後伊勢、山口の勧めで朝日歌壇にも投稿を始め、「新移植林」にも歌を寄せ続けた。西岡とのやり取りは歌にとどまらず、書簡や、応じられる範囲で西岡が日本語書籍を刑務所へ送っていた。郷の家族詠、望郷の歌獄中詠、詠わずにはいられなかった歌の数々は我々の胸を強く打つが、こうした歌の背景には西岡の姿があった。

・獄堀の内よりつづる君の歌移民史はまたプリズン史なる

歌人として、移民として西岡は郷を支えた。西岡は二〇一八年より「心の花」に入会。二月号に最後の詠草が掲載される予定である。